近代国家のさきがけ　薩摩の旅(1/3)

――西郷隆盛の足跡---

9/18/2016

北村社会福祉士事務所
代表　北村弘之

昨年、司馬遼太郎著の「明治という国家」を読んで以来、近代日本国家の礎を築いた「西郷隆盛」の行動、そして何と言っても、その人柄を知りたくて、同著「翔ぶが如く」を読んでみた。読めば読むほど、西郷隆盛の、人を引き寄せる魅力に興味を持ち、とうとう「薩摩の国」に足を運んでしまいました。

一回目では、「西郷隆盛の足跡」、二回目では「日本最初の産業革命の地」、三回目では今回の旅行を通しての「薩摩のエピソード」をお届けしたいと思います。

私の旅の流儀は、何と言っても地元の人と会話することです。単なる観光旅行でなく、その地がどのようにして栄えたか、またどのような気候風土が人に影響しているかに興味があるわけです。今回も、地元の「ボランティア」の方と一緒に2時間あまり、『西郷隆盛の「見よ勇者は帰る」城山』というテーマで案内していただきました。今回は、元高校社会科教師の城戸さんでした。城戸さんの曽祖父は西南戦争で戦死したとのことでした。

西郷隆盛は、1827 年現在の鹿児島中央駅の近くで生まれ、下級武士であったにも関わらず、若くして薩摩藩主「島津斉彬」に見いだされ、大久保利通(薩摩)、桂小五郎、高杉晋作(長州)、坂本竜馬(土佐)などとともに幕末そして明治維新の立役者となった人です。その後西郷隆盛は参議就任中に「征韓論(遣韓論争)」を打ち出しましたが、その論争に敗れ、明治 6 年 11 月参議(現在の大臣クラス)の職を降り、江戸から薩摩に帰りました。その際江戸の警備を担当していた約 600 人の薩摩人は西郷隆盛と一緒に薩摩に帰ったのです。それだけ西郷隆盛に魅力があっということがわかります。

翌年の明治 7 年、西郷隆盛は、この 600 名に及ぶ帰郷した士族と地元の士族の不平(政府に対して)を統率するため、鹿児島城内(鶴丸城)に「私学校」を設立し、将来に役立つ勉学や農業の開墾に従事できる環境を作ったのです。その資金は西郷隆盛の明治維新の功績を挙げたことの「賞典禄」ということです。莫大な金額が推察できますが、当時の県令大山綱良の協力があったからとも言えます。当時は、県令(政府)と言えども薩摩藩の名残があり、県令と西郷どんとは同士との関係にあったそうです。そこでは、外国人教師を採用したり、優秀な学生を欧州に遊学させたりしたといいます。当時現在の日本という国家と違い、当時は「藩」が一つの独立した国であったため、非常時に対応できる人材育成を目指したのです。

今も残る「西郷隆盛」が立てこもった洞窟(城山)

しかし、不運にして薩摩と明治政府の争い「西南戦争」が起き、西郷隆盛も不本意ながら巻き込まれていったのです。ちなみに、この西南戦争は日本での最後の内戦ということです。明治 10 年 2月戦争は勃発し、西郷隆盛は兵 13,000 名とともに鹿児島を発ち、近在の人を巻き込み、一時は薩摩軍の兵 3 万人とも言われたようです。しかし政府軍の拠点熊本城を包囲するも敗れ、田原坂の戦を機に、宮崎、延岡、そして山岳を巡り、薩摩城山の地に9月 10 日戻ってきたのです。この7か月間、西郷隆盛の指揮命令はほとんどなく、部下に任せ

たということです。鹿児島市内に戻ってきたときには、その兵は 370 名となっており、城山陣地をかまえた半月後の 9 月 24 日の政府軍の総攻撃に足を打たれたため自害したとのことです。49 歳でした。

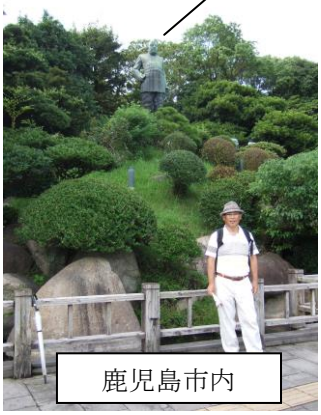
その日の総攻撃の明け方、政府軍の海軍音楽隊は「ショパン葬送行進曲」「ヘンデルの勇者は帰る」を演奏したようです。これは、薩摩同士大久保利通(当時政府軍)の計らいとも言われています。それを聞いていた山県有朋も最も信頼を託した友人の最後に涙を流したということです。

何故、このように西郷隆盛が、上からも下からも愛されたのでしょうか?

当時の薩摩の人は、無口であり、長々と言葉を発するより、一言で意思を表したり、態度で示すようだったようです。(小説「翔ぶが如く」より)) ガイド役の城戸さんは、家庭での生育環境とともに、「郷中制度」が大きくかかわっているのではないかと話していました。それと、江戸時代の「薩摩藩」は、江戸よりも海外の情報が早く入り、アジア諸国が植民地地化されており、いずれ我が国もという意識があり、自国を守る必要性を感じ取ったのではないかというものでした。

「郷中(ごちゅう)制度」とは、「郷」という地域単位で、6歳から 24、25 歳の男子が集まり、年長者が年少者の学問、武道、道徳、礼節などを教えるというもので、西郷隆盛もその一人でした。その加治屋町の郷では、西郷隆盛の他、大山巌、西郷従道、東郷平八郎、山本権兵衛、黒木為楨、山本英輔と明治維新とそれ以降の立役者が多くいます。大久保利通は幼少時に加治屋町へ移り住んだそうです。 郷中制度で、自発性、協調性、考える力を養われようです。何か、現在にも必要な人間的な教育のように思えました。

西郷隆盛銅像



鹿児島市内

ちなみに、鹿児島市内には、いたるところに銅像やオブジェがありました。
大久保利通、五大友厚、小松帯刀、黒田清輝、樺山資紀、大山巌、
東郷平八郎、坂本竜馬のおりょう、島津斉彬、忠義、久光、篤姫などです。

このように、多くの人の誕生した薩摩の地。近代日本国家の礎を排出した土地と言えましょう。

「敬天愛人」 西郷隆盛の有名な言葉

道は天地自然の物にして、人はこれを行うものなれば、天を敬する
を目的とす。天は我も同一に愛し給ふゆえ、我を愛する心を以て人を愛する也。」

(現代訳)「道というのはこの天地のおのずからなるものであり、人はこれにのっとって行うべきものであるから何よりもまず、天を敬うことを目的とすべきである。天は他人も自分も平等に愛したもうから、自分を愛する心をもって人を愛することが肝要である。」(西郷南洲顕彰会発行『南洲翁遺訓』より抜粋

この敬天愛人をモットーとした経営者として京セラグループを一代で立ち上げた「稲盛和夫」氏です。現在の KDDI の設立、そして日本航空等の数々の企業再建を果たしました。経営者のための盛和塾をあちこちで立ち上げており、私にとって稲盛氏は書物を通して人生の教訓を得た一人です。

以上